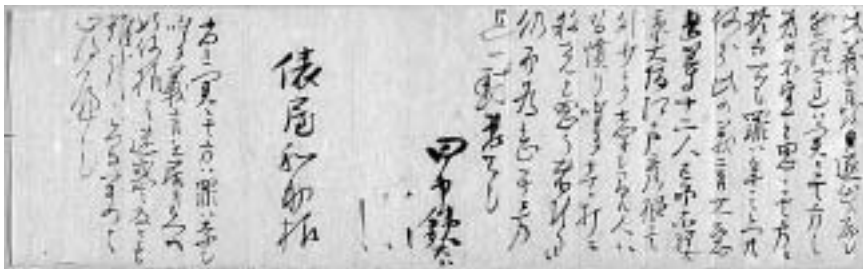


長野主膳への脅迫状



彦根和助宛投文写 (彦根城博物館蔵)

幕末の彦根藩主井伊直弼が、安政5年(1858)4月に幕府の大老に就任したとき、日本国内は日米修好通商条約調印と、その条約に関する天皇の勅許を得るための朝廷との交渉、さらには將軍の継嗣問題などの重要な問題が難航していました。6月19日には、幕府の総意として日米修好通商条約に天皇の勅許が得られないまま調印しました。その後まもなく、將軍継嗣は、直弼らが推す徳川慶福(後の14代將軍家茂)に決定しました。実子一橋慶喜を將軍継嗣に推していた水戸斉昭らは形勢を好転させるべく朝廷に工作して、8月8日には天皇から、一大名である水戸藩へ向けて、幕府の条約問題への対応を批判した勅命(戊午の密勅)が下されました。

この年、井伊直弼は腹心の長野主膳をたびたび京へ出向かせ、朝廷方や志士たちの動向を探索させていました。7月に江戸を出発した長野は8月3日には京に到着していましたが、8日の勅命に関しては察知できず、完全な失敗をしてしまいました。

8月15日には、長野が江戸にいる宇津木六之丞に宛てた書状の中で、長野が京都に到着する直前の7月末ごろ、長野が京都での定宿としていた彦根和助に、長野と彦根にそれぞれ宛てた脅迫状が投げ込まれたことを伝えていきます。

長野に宛てた脅迫状には、長野が「朝廷に対しても、幕府に対しても不忠不義をなし、私欲によって種々の謀議を企てていることはいちいち耳に入っている。前回の上京の節には殺害を企てていた」と述べ、「再度上京の報を聞き、直ちに首を取り、天下の害を除こうと思つたが、愚かな見でのごとであればふびんでもあるので、早々に剃髪し、どこかの山中に隠居し、歌の研究をして暮らせ、彦根・京・江戸・大坂には立ち入らな」と脅迫しています。

また、「彦根の姦物長野を愛護し、上京の節にはいつでも滞在させ甚

だ不届きである。長野という人物は、口に蜜あり、腹に劍あり、至つて欲深く、公卿方へ媚びへつらい、種々の謀議を企てていることは江戸にまで聞こえている。その方は長野がただ良い人物で、和歌をよく詠む人と思つていようであるが、実は天下に大害をなす人物である。長野を宿に置くようであれば、長野と共に殺害することになるので、この書状を見次第、長野を追い出せ」と記しています。

2通の脅迫状を見る限り、長野の京都周辺での動向をかなり詳しく把握していることがうかがえます。長野は、宇津木に長野をとりまく京都での危険な状態を伝え、密勅の情報収集が困難であったことを訴えようとしているようにも思えます。

余談ですが、脅迫状が投げ込まれた彦根は、京都市中京区蘇屋町に現存する老舗旅館です。舟橋聖一の小説『花の生涯』にも登場しますが、幕末の緊迫した京都市中であつて、彦根も長野もともに脅迫には屈せず、職務を全うしたのでした。

(彦根城博物館学芸員 齊藤祐司)

写真の史料は、常設展示にて4月5日(月)まで展示中です。